

令和2年度 関西福祉科学大学 卒業・修了証書 学位記授与式 学長式辞（全文）

正門脇の桜が咲き初める穏やかなこの良き日に、学部を卒業する皆さん、大学院を修了する皆さん、おめでとうございます。教職員を代表してお喜び申し上げます。

昨年4月7日に発出された緊急事態宣言以降、新型コロナウイルス感染が収束しない中、本学では文部科学省等との協議のもとで遠隔授業や変則的な対面授業を工夫して教育活動を継続させ、卒業式に至ることができたことに教職員一同安堵しています。学生の皆さんやご家族の忍耐と協力の賜物であると心からお礼申し上げます。



このような未曾有の困難な状況のもとでも志を持続させ、今日の日を迎えられた皆さんの頑張りに敬意を表し、卒業の日を楽しみに支えてこられた保護者の皆様にもお慶び如何ばかりかと拝察いたします。

来賓の皆さまには、ご多忙の中、時間を割いてお越しくださり、共に卒業をお祝いくださることに感謝申し上げます。さて、1年以上に渡る新型コロナウイルスの蔓延は私たちの日常生活を脅かし、人間の本性を露見させたように思います。自粛できない業務にやむを得ず従事している人への非難、感染者や濃厚接触者への偏見・攻撃など、残念ながら人間の醜い一面を見ました。一方で、エッセンシャル・ワーカーと呼ばれる、自らの感染への不安を乗り越え、検査や治療にあたる人たち、高齢者施設などで実直に仕事をする人たちの存在も確認できました。人間は「誰もが弱い、誰もが強い」事実を実感できた貴重な時間であったと考えます。

このように、様々な人々から成るネットワークの下で社会と生活が成り立っていることを「想像する」ことで、私たちは、互いに連帯する方向を探し続ける重要性を学んでいるのだらうと考えます。このことは、多様性を受容し、共生によって、より良い未来社会を創造すべきという国際的な行動倫理にも沿うものであらうと思います。

今年1月に亡くなられた歴史探偵こと半藤一利の『昭和史 1926-1945』を読み直しました。そこでは、戦前の日本史を振り返り、軍部が5・15事件や2・26事件などのテロ事件を契機として政党政治を瓦解させ、1945年の敗戦を招くに至るまでの政治史の分析から、日本を廃墟に至らしめた原因は、政治の中枢を構成した軍人が、①大局観や複眼的視野を持たなかったこと、②情報を軽視したこと、③希望的観測に頼り、起きたら困ることは起こらないだらうと考えたことにある、と結論づけています。これは、具体的に言えば、複数の多様な情報源から情報・資料を集め、客観的に冷静に評価・判断して行動することが、平和な社会を壊さない秘訣であることを意味しています。半藤一利は、最近の日本の状況には、戦前と類似した兆候が見られると警鐘をならしています。

実は半藤一利が推奨するような観点は、本学の目指すところに他なりません。本学は科学の目を持って何事にも取り組むこと、福祉社会の実現に貢献する人を育成することを設立理念とした大学です。皆さんはその福祉科学大学で学んだのです。

福祉社会の実現の第一条件は平和であることです。平和でない社会で、人々に他者を思いやる福祉の実現を求めることは容易ではありません。私は最近の国際情勢や我が国内の状況の中には、「自由や人権の制限」など、平和から乖離する方向性が窺えるように思われ、危惧しています。皆さんは、将来何があっても平和を志向することで、本学で学んだ意義を忘れずに行動してください。

本学の教職員は、大規模大学でないメリットとして、皆さん一人一人を知っています。個人として誰なのかを分かっています。困難に出会ったら、これからも教職員に連絡を取り、そのネットワークを活用して下さい。

最後に、今日卒業・修了する皆さんが、自らの命を大切にし、心身の健康に留意され、生き生きと幸せな人生を送られることを心から祈念し、お祝いの言葉とします。

令和3年3月23日
関西福祉科学大学 学長 八田 武志